



西暦1995年 港は豊かな生活空間をつくる…。

留萌港は世界の港につながる。

留萌港は、昭和11年に国際貿易港に指定されてから50年がたち道北における留萌港のはたすべき役割は、ますます重要になってきています。留萌港開発の歴史は、明治20年にイギリス人技術者C・S・メークの調査から始まり、数回にわたる留萌港整備計画の実施が、現在の留萌港の姿になっています。

そして、現在、留萌港は昭和70年（1995年）の完成をめざし第7次港湾整備計画（昭和61年度～昭和65年度）を進めています。では、留萌港がどのように変わろうとしているのか、ご紹介しましょう。

留萌港は、古くから石炭の積出し港として発展し、現在は原木の輸入、石油製品、重油、セメントの移入、石炭、米穀類の移出等を扱う流通港湾として道央、道北地域の発展に大きな役割をしますとともに、沖合・沿岸漁業の基地として重要な役割を果たしています。

この留萌港が将来予想される、大型船のけい留施設及び荷捌、保管等のための用地

や港湾貨物量の増大や輸送形態の変化に対応できるための港として生まれ変わるため現在第7次港湾整備計画が進んでいます。

この計画は、昭和70年完成を目標として、次のような施設等の充実をはかっています。
①外国との貿易を中心とする港湾施設の整備。
②入港船舶の安全性と港内静穏度を確保するため、水域及び外郭施設の整備。
③小型船だまりの整備。
④港湾周辺の道路の整備。
⑤港湾地域の快適な環境を確保するとともに、緑地等の整備。

このような港湾施設の整備が終わると左上の完成予想図のようになります。
では、次に完成予想図にある個々の施設について、現状と将来構造について説明しましょう。

北外防波堤

留萌は、強い北東の風と早い潮流により大型船の座礁事故や人命事故がありました。その苦い経験を生かし、留萌港に出入する船舶の安全性確保及び泊地の静穏を図るため、総延長71mの防波堤を昭和61年から整備しています。

三泊地区緑地

今までの港湾は、船舶が入港して貨物を荷降ろし、荷揚げをする所というイメージが強くありました。しかし、これからの港湾整備は、近年増加しつつある海洋性レジャーの多様性や市民が水辺で親しめる施設に対する要求に対して地域住民と港とのあり方を考えるうえで、緑地や公園の整備を進めていきます。

北岸地区

留萌本港内では、古丹浜ふ頭を埋立により造成していましたが、まだまだ、野積み場・保管用地については、不足している状態なので、今後増加が見込まれる港湾貨物に対応していくために用地を造成する計画があります。

南岸地区

今年の3月までは、内陸炭（赤平・芦別・上砂川炭）が国鉄貨物列車により運搬されていましたが、国鉄貨物線の廃線等の事情により、この地区の利用形態が変わろうとしています。

都市再開発用地

市では、国鉄高架の撤去等により、この地区の有効的な利用方法を検討していきたいと思っています。

古丹浜地区

古丹浜地区は、現在、南洋材（ラワン材）・北洋材（パルプ材）や海外炭の荷降ろし場・保管用地と利用されていますが、近年の輸入量の増加や国際貿易状況を考えますと今以上の利用度が高まり、この地区がはたすべき役割は、より大きなものになるでしょう。

